

メルロ = ポンティにおける〈制度化するパロール〉 —— 制度の間文化現象学序説 ——

廣瀬 浩司

1 はじめに

本稿¹では、モーリス・メルロ = ポンティが1950年代前半に執筆を構想しながら放棄した『世界の散文（への序説）』の草稿に出現する「制度化するパロール（parole instituant）²」という用語を中心に据え、メルロ = ポンティの「言語論」が、（個人的・社会的）制度の現象学にどのような意味で寄与するかを考えてみたいと思う。

あらかじめ結論を先取りするならば、この概念は、文化システムの部分と全体、ないしはシステム間の循環的な関係の創設において「生きられるパラドックス」に関っている。このパラドックスを、生きるべきものとして与えられる「語る主体」は、それに実践的に応答し、その実践の「意義」ないしは価値を、システムにとって過剰なものとして世界に沈殿させる。システムにおけるこのような過剰性にかかわるものとして、この概念は間文化現象学的研究にとってきわめて重要なものと思われる。それは文化内・文化間の異質なシステムに「自発的な翻訳」の可能性を保証するものだからである。

さて、「制度化するパロール」という言葉は、『世界の散文』において以下のような文章で出現する。

〔文化や言語のみならず〕厳密な科学に至るまで、制度化された諸記号と真の意義（signification vraie）の間に、すべてを支える制度化するパロールがないか探究するのが重要である³。

この用語にはいくつかの問題が収斂している。

まず「制度化するパロール」とは、「制度化された諸記号」すなわち言語システムと、その「真の意義」を媒介するものである。制度の真理とは、その合理性や規範性として記述されるものだが、制度化するパロールは、この合理性や規範性そのものの創設にかかわる。

またそれは感覚的な次元だけではなく、文化や言語、さらには「厳密な科学に至るまで」作動しているプロセスだとされる。文化、言語、科学などの諸「制度」において、「真理」の生成を辿り、その志向的「含蓄（implication）」（*Id.*）を多元的に解明すること、それがこの用語によって目指されている。

ただしこのプロセスは、既成の諸記号と意義とを媒介するたんなる中間項ではない。それは「すべてを支える」。つまり、むしろこのプロセスとその志向的含蓄こそが一次的であり、既成の諸記号や意義のほうがかむしろその派生体なのである⁴。概念的な意味に比すならば、それは「沈黙」であるが、この沈黙こそが通常の言語以上に言語的なものとして、個々の発話の間主観性

や翻訳可能性を可能にしているのではないか。

メルロ＝ポンティの制度化概念一般については他の論考でも考察してきたが、ここでは言語的システムとの関係を問題にし、それをエルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer) やクルト・ゴルトシュタイン (Kurt Goldstein) のフンボルト解釈に現れている言語哲学と突き合わせることで、新たな角度から「制度化」の問題を取り上げることにしよう。ただし他者との対話や共存の問題⁵、それと密接な関係を持つ時間性・歴史性の問題には立ち入らず、以下の問題に取り組みたいと思う。

1) 言語は、どのような意味で、(初期の「作動的・潜在的志向性」の延長で) 独自の志向性たり得るのか。本稿ではこの志向性が、晩年の『見えるものと見えないもの』において「反転可能性 (réversibilité)」(意味志向と意義の反転可能性) と呼ばれる契機を孕んでいることも示唆する。

2) メルロ＝ポンティは「知覚」の現象学から出発し、中期にそれを言語行為へと応用したとしばしば言われる。たしかに彼の方法論ないしは思想の流れとしてはそのとおりなのだが、筆者は〈感覚から言語へ〉という問い自体が誤った問いであると考ええる。「制度化」とはまさにこの対立を横断的に無効化する概念であり、感覚と言語の相互的基礎づけ (Fundierung) を前提とする。さらには『知覚の現象学』以降の思想が、エルンスト・カッシーラーの『^{シンボル}象徴形式の哲学』の一種のやり直しであるとの仮説のもと、メルロ＝ポンティの制度論を様々なシンボリックなシステムの現象学的フィールドワークとみなしたいと思う。そこでカッシーラー・ゴルトシュタイン・メルロ＝ポンティのフンボルト解釈を詳しく論じ、Fundierung よりも根源的なものとして、Stiftung という概念の意義を探究する。

3) 構造主義は、言語システムをモデルに、いわゆる「象徴界」の優位を説く。このことと、個人的身体の「表現」から出発して言語を問題にしていたメルロ＝ポンティの思想はどのように交差しうるのか。とりわけ問題になるのは、言語システムを特徴付ける自立性、差異性、情性、変質などを、主体の「表現」のプロセスにどのように組み込むかということである。そこで本稿では、言語表現の現象学がどのようにフェルディナン・ド・ソシュールからロマン・ヤコブソンに至る構造主義的言語学と交差するかを検討する。逆説的なことに、構造主義的システム論 (およびその客観主義の乗り越えの要請)こそが、主体に先立つ「言語の生」や「肉」の現象学を深化させることになるだろう。

最後に付け加えるならば、本稿のもくろみの前提には、言語システムを主体に外在的な規範のシステムとしてではなく、むしろ「超越論的領野」(『知覚の現象学』)のひとつの様態として考えていくことがある。ここでいう超越論的領野とは、部分的で偶然的なパースペクティブ(「世界観」としての言語)と循環的な関係にあるような、開かれた全体性のことである。この全体性は、間主観的な一般性の領野であると同時に、個人の「スタイル」の産出や変容の場ともなっている。「制度化するパロール」とはまさに部分的な意味の特異性を〈普遍化〉するプロセスないしは行為的・世界形成的な言語のことではないか。そうして意味の翻訳可能性が自発的に保証されるのではないか。

このような問題意識のもと本稿では、メルロ＝ポンティ思想の通時的展開にはとらわれず、むしろ「制度化するパロール」という概念を手がかりにその可能性を見きわめることを目指し

たい。

2 フンボルトとメルロ＝ポンティ

そこでまず第二の問題、すなわちヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語哲学の諸解釈を検討する。なぜフンボルトなのか。

エルンスト・カッシーラーは『象徴形式の哲学 (*Philosophie der symbolischen Formen*)』で神経病理学者クルト・ゴルトシュタインの諸論文を援用していたが、メルロ＝ポンティはまさにこのゴルトシュタインを『知覚の現象学』で論じる際に、カッシーラーの新カント派的・「主知主義」的な解釈と、現象学的解釈との違いを強調していた。そして『知覚の現象学』の出版後の1948年にゴルトシュタインは『言語と言語障害 (*Language and Language Disturbances*)』(1948)を出版する。この著作をメルロ＝ポンティは、ソルボンヌでの「意識と言語の獲得」という講義、そしてコレージュ・ド・フランスの「パロールの問題」という講義で読解している⁶。

この読解で重要な役割を演じるのがフンボルトである。メルロ＝ポンティは、ゴルトシュタインが援用するフンボルトを彼なりに解釈することで、ゴルトシュタインを新カント派的主知主義から救出しようとするのである。

ただし、すでにカッシーラーは、フンボルトが言語を、直観的な知覚や経験のための条件として捉え、たんなる認識の媒介以上のものと考えていたことを評価し、それを失語症研究と関連づけていたという⁷。またフンボルトが個別の言語大系の相違と、精神の生産的活動(機能的・実践的活動)の深い連関を問うたことは、文化そのものの生成を問う間文化現象学にとって重要な意味を持っているだろう。したがってメルロ＝ポンティはカッシーラーをも新カント主義から救出しようとしたとも言えるかもしれない。以上を踏まえ本節では、メルロ＝ポンティによるフンボルトの非カント主義的解釈を検討したいと思う。

1) カテゴリー的態度と *Stiftung*

『知覚の現象学』でメルロ＝ポンティは、ゴルトシュタインが象徴形式を特徴付けるために使用した、「カテゴリー的態度」の概念を退けていた。それは「語が意味を持つ」ということを認めない主知主義的な考えだというわけである⁸。

主知主義的言語論をメルロ＝ポンティは「発生的現象学」の立場から批判する。彼によれば、発生的現象学は「言語的、知覚的、運動的内容」と「それらを受け取り生気付ける象徴機能」との相互的な「基礎付け (*Fundierung*)」の関係を捉えるものである。

そしてこの関係において、偶然的で部分的な内容の自発的な出現という出来事は、形式によって包摂されるばかりでなく、そもそも精神が受肉するため、さらには、そもそも存在するためにも必要であるとメルロ＝ポンティは言う。ただし注意しなければならないのは、これがたんに生の事実、内容、出来事ではなく、あくまで上記の相互的「基礎付け」の直中において生起する根源的偶然性であるということである。相互的基礎付けのプロセスにおいて、経験的な

内容はたえず取り上げ直され続け、新たな形式へと導かれていく。偶然性や部分の現れが、意識作用の受動的綜合を促し、形式化をつねに新たに動機づけていくのである。このように形式によってけっして汲み尽くされないプロセスのことを当時のメルロ＝ポンティは「実存」と呼んでいた。このプロセスこそが、形式と内容の關係に先立つ一次的なものなのである。

注目すべきことにメルロ＝ポンティは、形式化を動機付け続ける「内容」の根源的偶然性のことを、「認識と行動の最初の設立 (établissement) ないしは創設 (fondation)」と名づけ、それがいわば消し去りがたいものとして残り続けることを強調している (PP, 147-148)。そしてこの設立や創設はフッサールの *Stiftung* という用語の訳語として使用されているのである。したがって *Stiftung* は、*Fundierung* とは厳密に区別されなければならない。それは *Fundierung* の二重の運動そのものを開始させ、その循環運動を支える隠れた原理だからである。

この *Stiftung* はなぜ消し去りがたいのか。それは、それがあある種の開かれた領野を開く出来事だからであり、意識がこの領野をすべて統御することはできないからである。別の言い方をするならば、*Stiftung* が開く領野は、意識がまさに作用するときに、ひそかに裏側からそれを支えているような領野であるがゆえに、意識はそれを全面的に対象化できない。こうしてこの領野の内部において、意識にとって未知なものとの出会いの偶然性が、なんらかの意味を持ちうるのだ。

この『知覚の現象学』の言語論において、すでに「制度化するパロール」の問題系が開かれていることに注目しよう。それは *Fundierung* と *Stiftung* という二つのフッサールの用語で整理される。

まず、象徴機能を、精神の「カテゴリー的態度」に優位を与えて説明してしまうと、それは傷つけられることも変容することもないものになってしまうことをメルロ＝ポンティは指摘する。失語症などの言語障害が記述できなくなるのだ。だから彼はまず形式化と内容の相互的基礎付けの記述から出発する。これが *Fundierung* と呼ばれている。

それにたいして彼が *Stiftung*、後に「制度化」と呼ぶものは、すでに指摘したように、この相互的基礎付けの直中において、つまり形式による内容の包摂が行われつつある場において、偶然的な内容がいわば能動的に働き返すことを意味している。言うまでもなく、晩年に「キアスム」と呼ばれる事態である。キアスムとは、能動性が内的な受動性に遭遇すると同時に、偶然的な内容に一種の能動性が宿るときに、前客観的な「超越論的領野」が開かれる＝暴かれることを示しているのである。意識の世界探索は権利上は無限であり、その意味では意識は境界を持つことなく広がる。しかしこの「超越論的領野」において、意識的な能動性が、一種の内的な重み、自生する意味の立ち現れ、そして他なるもの一般に遭遇するのである。

この視点からすれば観念論の主体は、たえず偶然性の出現、統合できない部分の (メルロ＝ポンティがしばしば使用する言葉で言えば)「切迫 (imminence)」に脅かされ、本質的に傷つきうる主体に変容する。カテゴリー的態度は、いわばその創設の時点において可傷性を含んでおり、そしてこの可傷性においてこそ、新たな形式化の「芽生え」(セザンヌ)を見出しうるのである。

そしてカテゴリー的態度の「主体」は、たんに認識の主体でなく、同時に、行為の (表象を

介さない) 主体であることも付け加える必要がある。この主体は、まさに世界を脱自的に目指して行為しつつあるときにこそ、内容の偶然性に出会うのであり、そのときにこそおのれ自身の崩壊と再形式化の契機を見出すことができるからである。行為せず認識するだけの主体の前には、主体をけっして脅かさない「対象」や「表象」しかない。部分的で偶然的なものは、超越論的領野そのもののひそかな歪みとして気づかれ、「主体」の側の行為の始動や変容をうながす。内容の出現の自発性にたいして諸行為が応答し続けること、このことにこそメルロ = ポンティは「実践」という名を与える⁹。この場合、実践は理論や認識に対立するものではなく、むしろ行為と認識の協同的な機能を含む。

さらにこの消し去りがたい Stiftung は内容と形式の関係のある種の持続性をも保証する。というのは、Stiftung が開く領野こそが、精神に「現在の深さ = 奥行き (profondeur présente)」を付与し、精神はそこにおいて、いわば垂直的に「おのれの過去を担い、保存する」(PP, 148, n.) からである。このように垂直的な深みを備えた「主体」は、実践的 = 認識的行為において、世界に身を投げ出しつつ偶然性に出会い、統合しがたい部分の切迫を経験し、それに促されて新たな実践と認識の時空間を切り開いていく。この実践的かつ認識的な「切り開き」を可能にする行為こそが「制度化するパロール」である。

ただしメルロ = ポンティにとってこの Stiftung はそれ自体として現前し得ないもの、意識にとっての「盲点」¹⁰ である。それは象徴システムの「機能のスタイル」としてのみ、その都度異なった様態で現れる。というよりは、私たちはこの「スタイル」を通してしか、その破壊と更新の狭間においてしか Stiftung という根源的創設を経験することはできない。それは「間接的に」しか経験できないもの、つまり距離をおいてのみ根源的に現前するような、沈黙の世界なのである。

2) 制度化するパロールと世界現出の諸様態

以上を踏まえ、ゴルトシュタインの 1948 年の著作の読解を検討してみよう。

まずメルロ = ポンティは、1949-1950 年度のソルボンヌでの講義『意識と言語の獲得』においてゴルトシュタインを取り上げ、前述の「カテゴリー的態度」が絶対的精神の機能ではないこと、そして、ある種の失語症によるこの態度の病理的解体が「知覚そのものの変容」に結び付いていることを指摘したうえで、『言語と言語障害』という 1948 年の著作がこの考えを深化させていることを強調する (PPE, 62-67)。

この著作でゴルトシュタインは、フンボルトの意義として、以下の三つを挙げる¹¹。(1) 言語は静態的な現象ではなく、エネルギー、すなわちダイナミックな過程であること。(2) 言語は概念の記号ではなく、私たちの「世界観 (Weltansichten. ゴルトシュタインは world perspectives と英訳している)」、すなわち世界に対する態度や視座の諸類型を示すこと。(3) この世界観の個別な様式を支える能力が「内的言語形式 (innere Sprachform)」であり、言語形式の特殊な組織化やコミュニケーションにおいて、表出されること。(4) この「内的言語形式」は個人の内的経験ではなく、「私たちが自分の思考等を、外的な言葉に表出しようとするとき、そして聴取された音を言語として知覚したときに起きるプロセスや経験の総体」¹² と定義される。(5) したがって内的言語形式は、一方で「非言語的な精神的なプロセス」に関

係し、他方では「外的な道具性（外的な言葉）」に対応する。それは両者が相互に補い合う場なのである¹³。

以上のような視点がとりわけ有効なのは、幼児がはじめて獲得する言語の理解においてである。ゴルトシュタインは、ジャン・ピアジェが幼児の初めの言語を「自己中心的（egocentric）」と形容したことを批判し、それにレフ・ヴィゴツキーの言語論を対置する。ヴィゴツキーは、幼児が発する内言がすでにある状況における文であること、同時に、その明確な意味はまだ理解されていないことを指摘した。状況的に発せられる文と、その概念的意味の獲得にはずれがある。だがこのずれは、意識的な理解を精神的に方向付けたり、言語獲得に伴う困難や障害を乗り越えたりするのに役立っている。つまりそれは初めから「社会的現象」として、全体的な状況の理解を先取りするのに役立つ（*Ibid.*）。

さてメルロ＝ポンティはこの理論を彼の思想の中にどのように取り込んだのだろうか¹⁴。二つのテキストを検討してみよう。

（１）パロールの「スタイル」とその可逆性

まず1951年の「言語の現象学について」（« Sur la phénoménologie du langage »）という講演でフンボルト理論を以下のように要約する。

言語を獲得する際に幼児が同化する語る力は、形態学的、統辞的、語彙的な意義の総体ではない。言語獲得のためにはそうしたことを知るのは必要でも十分でもなく、語る行為は、ひとたび獲得されると、私が表出しようとするものと、私が使用している表現手段の概念的配置の比較をおよそ前提しない（S. 143）。

ここでは言語の獲得が、文法的な要素やその規則の修得ではなく、意図＝志向と外的言語との不可分な統一体の獲得であることが確認されている。そのうえで彼はフンボルトの「内的言語形式」の概念を援用する。

私が語るとき、私の意味志向を表現へと導くために必要な語や言い回しが私に推奨されるのは、フンボルトが内的言語形式 *innere Sprachform* と呼ぶもの（現代の人〔ゴルトシュタインによれば C. Wernicke〕が語詞概念 *Wortbegriff* と呼ぶもの）によってでしかない。内的言語形式とは、語が依存するある種のパロールのスタイルであり、このスタイルによって、私がそれを表象することがなくても、語が組織される。私のいまだ沈黙した志向と語の媒介をするような、言語の「言語的」意義があり、その結果として、私のパロールは私自身を驚かし、私に私の思考を教える（*Id.* 傍点筆者）。

「内的言語形式」とは「パロールのスタイル」として、語や言い回しを組織する。つまり意味志向が表現手段に媒介されるながら現れるスタイルこそが、「内的言語形式」なのである。

さらにこのパロールが「制度化するパロール」であれば、私はこのパロールによって驚かせ

られるという逆転が生じる。これが未知な意味の獲得と記号化の瞬間だ。そのとき意義のほう就是我的表象や意図をいわば侵蝕する。語のほうが思考を侵蝕するのである。幼児が言語を獲得すること、すなわち「制度化するパロール」を語るという実践は、このような意味志向と意義との「反転可能性」(réversibilité)を内在させていると考えることもできるだろう。

したがって制度化するパロールは、その発話行為のプロセスにおいて反転可能性を実現することによってこそ、身体を外から貫く叫びのようなものを、環界 (Umwelt) の言葉の意味として、充実な記号へと導くことができる。内的言語形式は、このような意味生成的な反転可能性の場として、発話者とその環界を媒介する特異な志向性なのである。

(2)「世界観」の制度化としての言語

ゴルトシュタインの『言語と言語障害』を再検討しているコレージュ・ド・フランスの1953-54年度の「講義要旨」では、カテゴリー的態度に結び付いた充実な言語と、自動的な言語(語のたんなる外的な知識)の二項対立、すなわち概念と言語の道具性の二項対立を退け、両者の相互依存を説くことによって、ゴルトシュタインが精神と言語の対立を乗り越えていることが再確認される。

そして注目すべきことにメルロ = ポンティは、「内的言語形式」概念を、差異のシステムとしての言語システムというソシュールの洞察に関係付ける。

言語の精神というべきものがあり、精神はつねに言語を担っている。つまり言語とは、差異化の大系であり、そこにおいて主体の世界への関係が連結する。脱差異化としての神経病理という考えと、示差的な (diacritique) 記号というソシュールの考えは、「世界観 = 世界への視座 (perspective sur le monde)」という概念において合流する (RC, 37-38)。

言語を担う精神という考えと、言語の差異化・脱差異化という考えはなぜ一致するのだろうか。それはおそらく、「世界観」としての言語と同じように、語や音素の組織の様式が、客観的な法則によって外的に規定されるのではなく、各言語システムに固有の仕方^{スタイル}で、「パロールのスタイル」を表現しているからだろう。そのどちらも、超越的な意義の与えられ方、さらには世界の一定の与えられ方への、ある種の応答の様式なのである (cf. PPE, 66)。

このような解釈は、ソシュールの言語システム論を、記号論を創始するものとしてではなく、むしろフンボルトの言語有機体論の延長上に理解することを示唆する¹⁵。現象学にたんに構造論やシステム論を接続する以上のことがここではおこなわれている。以下の引用はそのことを示している。

それは言語という道具を、あるときは語詞連鎖の知覚に、またあるときは、発話へと動員するものである。精神はみずからが創出したこの言語の有機体に依存し続け、そこに生命を吹き込み続けるが、あたかもそれが固有の生を持っているかのように、言語に衝迫を与え続ける。カテゴリー的態度とは純粹精神の作用ではなく、「内的言

語形式」の敏捷な機能を前提しているのである（RC, 38）。

こうして言語有機体論の遺産をシステム論に接続することによって、「生のスタイル」というべきものの諸様態を分析することが可能になる。言い換えるならば「カテゴリー的態度」は、分節言語の差異化・脱差異化の程度に関連して（その部分的崩壊を含めた）、さまざまな内的段階を持つことになる。言語という有機体の「生のスタイル」が、主体の世界に対する開かれ（およびその閉鎖性）の（ソシユールの意味での）「価値」を規定するのである。

さらにメルロ＝ポンティは発話行為のコンテクストという概念そのものをも括弧に入れてるように思われる。分節言語は「与えられた状況に追加的な意味をもたらすだけでなく、おのれ自身のコンテクストを導く」（RC, 38）。つまり、もし言語が制度的（*instituant*）であるならば、それは来たるべき他者にとっても意味を持ちうるようなコンテクストを先取りする。制度化するパロールは、それが意味を持つ以前において、すでに間主観的なものと接続しているのである。

言い換えるならば、制度化するパロールは、一定のコンテクストを前提とせず、むしろ新たなコンテクストを創出するような言語である。語る主体は、新たな差異化の現れの諸様式に応じて、語りのスタイルを変容させる。しかしコンテクストを変えながらも、それはそのつど一つの世界の表出であり、それに対する応答なのである。

したがって「世界観」「世界への視座」としての言語という考え方は、文化相対主義ではない。それは部分的なパースペクティヴが、つねにそれ以上のもの、それ以外のものへと連結し、なにか別のもの、未知なるもの、他なるものへと遭遇し、翻訳可能になる可能性を孕んでいること、つまり文化が間文化的なものへと内側から開けることに価値を与えるような考え方¹⁶だと言えるだろう。

3 言語システムとその超越

フンボルトの言語哲学の、カッシーラー、ゴルトシュタイン、メルロ＝ポンティによる解釈において確認したのは、制度化するパロールが、精神と概念との間で媒介的な「生のスタイル」を営んでいること、そしてその媒介は両者の交差や反転を実現するということである。

今度は、この媒介の場である言語そのものの研究から、すなわち言語学から出発することにして。ただしメルロ＝ポンティへの言語学の影響についてはすでに多くの研究があるので¹⁷、いくつかのポイントを書き留めるととどめる。

メルロ＝ポンティは『世界の散文』の中で「言語の神秘」について語る。「言語の神秘」とは以下のようなものである。ロマン・ヤコブソンのような音韻論学者が対象とするような「言語システム」において、言語は「それ自体としか関係せず」、「意味に背を向けている」（PM, 162）。これは既に「制度化された」言語である。

しかし「神秘的」なのは、まさにこのような言語の自己参照において、「追加物のようにして、言語が私たちを意義へと開く」ことである。

ここで重要なのは、追加物という言葉である。すなわち制度はつねにおのれに対する過剰性を孕むということだ。たとえばひとつの音素対立が、言語全体と暗黙に関係し、語る主体に「切迫(imminent)」(S. 66) するときにこの過剰性が予感される¹⁸。だから言語は厚みを持ち、歴史的な「深さ」も持つ。欠如や禁止や掟などの否定的なものではなく、過剰性、すなわち諸部分のオーバーラップや、全体性の部分への折れ重なりこそが制度を支えているのだ。

この過剰な「深さ」のおかげで「制度化する言語」は、それ自体新たなものを創出すると同時に、それを沈殿させ、一定の持続性をもった領野を開き、みずからのコンテクストを書き換えることができる。もちろん幼児はある言語のすべてを一挙に把握するわけではなく、それはひとつひとつ学ばれ、階層化しなおされなければならない。だが、そもそもこうした学習が可能になるような超越論的領野を開くのが、制度化する言語である。このことをメルロ＝ポンティは、制度化する言語は「出来事であると同時に真理に開かれている」(PM, 173) と表現する。

このことを具体的に検討するため、ふたたび幼児の言語獲得の例に戻り、ソシュールの功績を讃えることから始めている「間接的言語と沈黙の声(« Le langage indirect et la voix du silence »)」の冒頭の数頁を検討することにしよう。ここでとくに注目したいのはメルロ＝ポンティが、幼児の言語獲得の過程を一連の「生きられたパラドックス」として提示していること(S. 65)である。

1) 想定されていると思われるのはまたしても、幼児が意味を孕んだ語ないしは記号を、初めて発する場面であるが、これが差異の問題系と合流している。ある一つの記号を発するとき、幼児が表出しているのは、その記号の意味や概念ではなく、「その記号それ自身と他の記号との偏差」である。そしてこのことはすべての記号に妥当する。だとすると、ある記号を部分的にひとつでも習得するときには、言語システム全体を(潜在的に)習得していなければならない。部分と全体の独自の循環があり、語ろうとする幼児は、この循環を生きなければならない(S. 63)。

2) しかしこの循環は「言語の使用」によってゼノンのパラドックスのように乗り越えられるとメルロ＝ポンティは言う(*Id.*)。幼児が「語る」という実践を行うとき、幼児が獲得しているのは、まずは記号の意味ではなく、言語システム全体、そしてその中の「対立原理」である。

自分を渦のように取り巻く騒めきの中に、つまり他者たちの言葉の中に、幼児はこの全体性の「間主観的価値」を感じ、この全体性において、一つの対立の原理を掴み取る。そのとき、言語全体が意味的なものとなり、記号が意味を持ち始める。「言語システムはそれを学ぶ者においてみずからに先立ち、みずからを教え、みずからの解説を示唆する」(S. 63-64)。言い換えるならば、私たちがフンボルト論をコメントしながら引用した「パロールのスタイル」は、初めから間主観的な領野が「切迫」(S. 66)するスタイルである。つまりここで「切迫」とは、言語システム全体がある特定の音素対立などにおいて、現出する様態を指す。部分と全体の循環を「切迫」として生きることが必要なのである。

3) 幼児はある種の間主観的領野に取り込まれているがそれは初めは完全な意味を持たない。しかしその特有の「メロディー」(RC, 35)「調子、速度(allure)、リズム、回帰」¹⁹などが、幼児のコミュニケーションの欲求と共鳴し、それらが幼児の身体を貫き、それに促されるよう

に、幼児はある言語大系にいわば斜交いに（すなわち意味を対象化することなしに）入り込む。

このようなとき、幼児がほとんど自発的に発した叫びのような音声、言語システムの媒介を経て、（幼児にとっても他者にとっても）意味のある言語になる。上記の「リズム」や「回帰」の比喩が孕む、特異な時間性にも注目しよう。言語行為は、はじめはあたかも概念を欠いた言語として発話されるが、それはすでに間主観性を孕み、ある種の言語的領野と関係している。この発話にいわば回顧的に意味を与えるようにして、意義が到来する。この回帰的な運動こそが、領野に一種のリズムを付与するのである。

これは自己から発して自己へと遅れて回帰してくる「メッセージ」であり、これが「私に私の思考を教え」（前出）、同時に、他者たち一般とのコミュニケーションの「母型」をかたちづくる。このような自己と自己との間における、距離や遅れ、そして他者との関係を孕んだ接触というべきものが、間主観的な意味生成の契機なのだ。

このように構造主義的な言語学は、差異のシステムとしての言語システムの獲得を、概念を介さず、かといって古典的な心理学や有機体論にも頼らずに説明するのに有益であったと思われる。しかしそれはたんに超越的な意味に「背を向けて」はならず、部分と全体のパラドックスを生きる者を、世界を語る主体に変容させる。語るという実践において、主体は世界の意味のひとつの現れに摑まれ、制度化するパロールを発するのである。そうして「語る主体」は、たんなる「情報」の媒介者ではなく、翻訳可能なく世界の出来事>のいわば「証言」者となるとメルロ＝ポンティは言う（Cf. PM, 188, 208.）。

4 制度とは何か

最後に補足として、冒頭で強調した「制度」「制度化」という用語そのものに込められた意義を考えてみたい。メルロ＝ポンティにとって制度とはそもそも何なのだろうか。実はメルロ＝ポンティはこの用語を使用する意図を明確にしていけないので、むしろ間文化現象学にとって制度概念が持つ意味について、メルロ＝ポンティから出発して引き出しうることを仮説的に示しておく。制度とは、言語学のみならず、たとえばデュルケム社会学やレヴィ＝ストロースらの社会科学などによって、とりわけ20世紀に使用された用語である。この概念的負荷に対してメルロ＝ポンティはどのように対処したのか²⁰。興味深いことにメルロ＝ポンティは、幼児が発する制度化するパロール、そして別の講義で扱う文学的言語などをモデルに²¹、言語学や社会学を再検討する方向で「制度」を理解するのである。

（1）制度化概念は偏差を肯定する

まずメルロ＝ポンティにとって「制度」は、個人の行為を外部から統御するような規制や規範ではない。制度においては「規範に対する偏差」こそが個人に現前する、というのがメルロ＝ポンティの出発点にある考え方である。

ただしそれゆえに既成の規範や合理性のシステムが、貶められるわけではない。偏差は偏差にとどまったり、それだけで実体化したりすることはなく、むしろシステムに接続しようとする

る傾向を内在的に備えている。だから一方で、言語行為は規範に依存しようとし、それにたいして制度は、言語行為の結果の予期（なにか意味のあるものの切迫）を可能にする。さらに、偏差がシステム内の潜在的可能性を引き出し、システムを中心をずらすようなものであれば、それは新たな行為の選択肢を切り開き²²、行為者が予想外の結果に遭遇することもある。それが制度化するパロールである。

したがって個人の発話は、それが制度的なものであれば、たんに規則や規範に従うのではなく、またそれを単純に破壊したり否定したりするものでもなく、いわば規則に従いつつ同時にそこから逸脱するものである。この同時性が切り開く「深さ」こそが、制度化するパロールという「現在」によって確保されている。この現在を中心に、時間的・空間的ダイナミズムを備えた超越論的領野が広がるのだ。

だとすれば、規則から逸脱するもの、排除されるもの、偶然的なものが肯定的（これを彼は括弧付きで「目的論的」とも言うが）な役割を演じていることがメルロ = ポンティ的な制度の第一の特徴だと思われる²³。

ただし「制度化」が起動するプロセスは、いわばおのれが生み出したものにおいて、おのれの作動を隠蔽するプロセスでもある。たしかに制度化とは、行為の表象に先立つ次元における選択や予期の「開け」のことである。しかしこの選択や予期の複数性や豊かさは、ある特定の行為が行われた後にはみ垣間見られる。意識化はつねに遅れてみずからの起源を隠蔽するのである。

そして同時に、制度の回顧的合理化のメカニズムが発動し、制度化という行為そのものも自己を忘却する。Stiftung はみずからが開いた領野において自己を忘却し、それが言語行為を促し、そうして遅れて到来した意識化が、表象的意味を確立することによって、Stiftung を隠蔽する。

だがこのプロセスによって世界の沈黙が汲み尽くされるわけではない。制度化という出来事はこの合理化、規範のシステムが原理的に変更可能なことを、おのれが開いた超越論的領野の歪みや過剰性において、指し示し続ける。たとえば幼児が世界を探索しながら、未知なるものに出会うときに導きの糸となるのが、この過剰性およびそこに生じる「偏差」なのである。

言い換えるならば偏差とは、行為の規範を創設したり導いたりする原理であると同時に、その変容の原理でもある。この変容の潜在性が「肉」や「生」と呼ばれるが、これはあくまですでに制度化されたシステムから出発して遡行的・間接的に確証される。肉や生の概念は、システムの概念を経由してはじめて語られうると言ってもよいだろう。

（2）制度化はシステムの諸項^{ゲーム}を形成する

そして第二に制度とは、たんなるゲームの規則、たとえばチェスの駒に一定の動きが指定され、その限りで自由な動きが保証されるようなものではない。これはあらかじめ規則を指定される「辞項^{ゲーム}」が実体として措定されていなければならないが、メルロ = ポンティにおいてはこうした辞項にそれらの偏差の方が先立つからである。メルロ = ポンティにおいてはチェスの駒のような項は先在せず、むしろ「制度化するパロール」があつてはじめて、こうした項が形成され、さらにはそうした項が投錨するコンテクストが書き換えられることもある。メルロ

= ポンティの制度は要素形成的さらには文化形成的なのだ。

だから実証科学の対象となる客観的な諸項（たとえば音素）は、制度化という行為そのものの自己忘却によって成立し、その意味ではこうした科学そのものが、制度化のプロセスを完成するものでもある。メルロ＝ポンティは科学を否定するのではなく、その制度化の過程を明らかにしようとしている。たとえばいわゆる「当事者」の断片的で偶発的な言葉が、さまざまな全体性との関係付けにおいて科学的言説の対象となる。両者は相互に基礎付け合っており、そこにいかなる真理（または誤謬）を見出すかによって、「学知的な視点」のスタイルが規定されるのである。

（３）出来事と象徴システムの中の「象徴的母型」——制度の持続性

規則から逸脱するものや偶然的なものの現れ、これらは「出来事」と呼ばれる。メルロ＝ポンティにとってこうした出来事の経験が制度化の機縁となることは後に確認する。しかし出来事はたんに瞬間的でローカルなものにとどまってしまうこともある。この出来事がなんらかのかたちで持続的なものとなるためには二つの条件が必要である。

まず、それはこの出来事がなんらかのかたちで象徴大系に取り込まれ、そこになんらかの偏差（「ぶれ」(bougé)）をもたらすこと、さらには新たな意義（signification）を出現させ、沈殿させるということである。

そしてメルロ＝ポンティにとって重要なのは、この出来事とその理念性や超時間の本質において存続するのではなく、その偶有的性格を保ちながら、他の出来事とのたえざる共鳴やオーバーラップによってみずから変容させていくことで、自己を維持していること（忘れられないこと）である。したがってこの自己維持は、出来事の時間的な「スタイル」すなわち「調子や速度やリズムや回帰」の恒常性として記述されるのだ。

こうしてメルロ＝ポンティは、偶然の出来事そのものが持つ、非概念的・非イデア的な持続性を解明しようとしている。出来事が作り出すこの持続性のことをメルロ＝ポンティは「象徴的母型 (matrice symbolique)」と呼んでいる。メルロ＝ポンティの制度は、出来事と象徴システムの交差における「象徴的母型」の生成の場である。

（４）主体が「語る主体」になる場としての制度

しかしながら母型は萌芽的なものととどまる可能性がある。新たに生じた意義は、システムに取り込まれないかもしれない。しかし「制度化するパロール」とは、個人的ないしは集団的な「主体」による、この意義の「取り上げ直し」でもある。この取り上げ直しによって、意義はシステムに取り込まれ、真に間主観的な記号となる。

まったく未規定であった漠然としたコミュニケーションの意志をもった主体が「語る主体」となるのは、こうした記号が制度化された後に過ぎないということも付け加えておこう。メルロ＝ポンティの言語思想というすぐさま「語る主体」への回帰ということが持ち出されるが、彼が記述しようとしていたのはむしろ、言語システムという超越論的領野に投錨した者が、語る主体になるための長いプロセスであり、おそらくはそうにして象徴システム一般に参入することで、主体は「自己の技法」「自己の自己に対するテクノロジー」(フーコー)をいわば

身体的な道具として体内化していくのではないだろうか。体内化されたロゴスがここで身体技法と内的に接続する道具として働き、切迫する全体性を迎え入れる。この主体が制度化するパロールは、こうした世界の全体性への参入という試練の痕跡なのである。

（５）分析の循環に正しく入り込むこと

すでに容易に気づかれるように、この制度論には分析上の循環がある。共同世界をひそかに保証するものである沈黙の世界（偏差を通して垣間見られる世界全体）は、そこに生じる制度化するパロールという部分的な出来事によってのみ確証されるからである。別の言い方をすれば、「制度化するパロール」とは新たな意味の創設というひとつの出来事であるが、それが語る意味は、制度以前の沈黙の世界に先在している、あるいは先在していたものとして現れる。いわば過去が未来から到来するかのようにして、経験されるのである。

この循環にうまく入り込むことにこそ、「制度化するパロール」が真理を語る言説となる契機がある。しばしば誤解されているが、メルロ＝ポンティは「（身体的）共通世界」を権利上前提したことはなく、それは「制度化するパロール」によって、獲得ないしは再獲得されるべきものである。それ以前は、そのような全体性は「切迫」する「雰囲気」のように、行為を促すものにすぎない。しかしこの切迫への応答としての実践がかたちづくる「生のスタイル」は、一時的であると同時に、消し去りがたい痕跡を「制度の肉」に書き込む。そのようにして制度は、原理的に変更可能でありながら、個人的・集団的な表象以前の次元で、自己を維持するのである。

＊

このようにメルロ＝ポンティにとって制度とは、〈偶然的で部分的で経験的な出来事〉と〈一定の合理性と規範性を備えた、過剰な象徴システム〉の内的で相互的な接合のプロセスの総体である。このプロセスにおいて、ときに新たな象徴的母型が生じ、それに貫かれるようにして、新たな超越論的領野としての実践的主体が生成する。その生成のプロセスに受動性と能動性の交差や反転が出来事として生じ、制度のダイナミズムを形成する。

制度化するパロールとは、このような非概念的な生成のプロセスにおいて、芽生え続ける主体の語りの実践である。制度の真理の主体となるための「試練」の語り、あるいは語りとしての試練、と言ってもよいだろう。それは反転可能性のメカニズムを内在させてたえず自己に還帰する運動であり、生のスタイルの練り上げ直しなのである。制度は自己のたえざる再発明の場であると言ってもよい。

だから冒頭で唆したように、制度において、感覚から言語へ、あるいは個人から社会へといった階層的な発想は妥当しない。フロイトの「多元決定」を想起するまでもなく、ローカルで部分的な出来事は、それが深い次元に遡れば遡るものであるほど、散逸する予測不可能な象徴システムに同時に関係し、多産的になる。したがって単一な出来事としての制度化は、それ自体が多元化の可能性を孕み、他のシステムとの共鳴の場となる。このような可能性のことをメルロ＝ポンティは別の文脈で「自発的な翻訳」(MSME, 131)²⁴と呼ぶ。制度化とは文化内・

文化間の異質性を自発的に翻訳するシステムである。

同じ事態をマクロな方向からみるならば、多元的なシステムからなる制度において、ひとつの現在の出来事を「軸」にして新たな次元が開け、こだまのリズムが響き合うように、異質なシステムの「同時性」を実現するもの、それが制度化という単一の出来事である。このように出来事と制度の内的で相互的で持続的な関係は、単一性と多元性、すなわち特異性の生産と非概念的普遍化という二つの側面を備えている。

メルロ＝ポンティのテキストもまた、こうした制度化するパロールが、自然というゼロ地点から厳密な科学に至る、さまざまな多元的制度を横断するプロセスを渉猟する記録ないしは痕跡として読まれるべきだろう。そこにおける出来事を証言し、それを間主観的な意味にまで自己生成させ、非表象的な次元で、諸制度のあいだにこだまを響かせること、それが彼の発した制度化するパロールである。その意味でメルロ＝ポンティのテキストは、ナショナリズムと文化相対主義の対立を越えて、また「上位」のシステムと「下位」のシステムの階層性を越えて、つねに新たな思考の次元を切り開き続けるための制度として読みなおしうるのである。

1 本稿は、「間文化現象学研究センター」(立命館大学)シンポジウム「制度化」(2016年3月13日、立命館大学衣笠キャンパス)における口頭発表の原稿を大幅に加筆修正したものである。シンポジウムをオーガナイズ、司会してくださった立命館大学教授加國尚志氏にこの場を借りて御礼申し上げる。またこのシンポジウムにともに参加して、側面から種々の刺激をくださったマティアス・オーベルト、小林琢自、酒井麻衣子各氏にも感謝したい。なお本稿は「科学研究費補助金・基盤研究(B)(一般)、課題番号26284007」の研究成果の一部である。

2 周知のとおり、この著作は、その一部を書き換えるかたちで「間接的言語と沈黙の声」という論文として発表され、その後 *Signes*, Paris, Gallimard, coll. « folio/essais », 1960 (以下Sと略し、このポケット版の頁数を記す)の巻頭論文として収録されている。

3 *La prose du monde*, Paris, Gallimard, coll. « Tel », 1969, p. 170. 以下PMと略す。

4 この用語は『知覚の現象学』における「語るパロール (parole parlante)」や「作動する言語 (parole opérante)」などの用語とほぼ同義であろうが、このような広い射程を際立たせるため、以下ではこの語にこれらの他の語の志向的含蓄を含めて考察を進める。正確に言うならば、初期の身体論と結び付いた「語るパロール」が、「言語システム」においてどのように働いているかを考察する過程で「制度」「制度化するパロール」という用語が出現したのだと思われる。

5 中期につながるメルロ＝ポンティの他者論と「斜交いの意味作用」の関係について明快かつ丁寧に論証したものとして、酒井麻衣子「現れる他者・消える他者：ソルボンヌ講義「他者経験」をめぐる」、『メルロ＝ポンティ研究』(メルロ＝ポンティ・サークル)、第19号、2015年、pp. 1-15 参照。

6 Kurt Goldstein, *Language and Language Disturbances - Aphasic System Complexes and their Significance for Medicine and Theory of Language*, New York, Grune & Stratton, 1948. « Psychologie et pédagogie de l'enfant », *Cours de Sorbonne 1949-1952*, Lagrasse, Verdier, 2001 所収 (以下PPE)。Maurice Merleau-Ponty, *Résumés de cours (Collège de France 1952-1961)*, Paris, Gallimard, col. « Tel », pp. 37-39 (以下RC)。

7 カッシーラー自身が、カントの哲学が孕む主知主義的な問題点を強く意識し、フンボルトの思想によりそれを補いつつ拡大しようとしていたことについては、齋藤伸『カッシーラーのシンボル哲学：言語・神話・科学に関する考察』、知泉書館、2011年、p. 188 参照。

⁸ *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, p. 206 (以下 PP。邦訳との対照の便のため初版の頁を記す。)

⁹ メルロ = ポンティは実践 (praxis) と行為 (action) を明確に区別する。実践とは、「生まれつつある精神」であり、「状況の練り上げ」として認識の土台である。Cf. *Le monde sensible et le monde de l'expression, Cours au Collège de France, 1953*, Genève, 2011, p. 52, 66. Cf. aussi « Eloge de la philosophie », in *Eloge de la philosophie et autres essais*, Paris, Gallimard, col. « folio/essais », p. 52. 「[マルクスにおいて実践とは] 諸行為の交差において自発的に描き出される意味のことであり、それにより人間は自然や他者たちとの関係を組織する。」だがこの問題を引き継いだのは、制度を象徴的大系と考えた言語学者たちである、とメルロ = ポンティは議論を展開していく (p. 57)。

¹⁰ 可視性を切り開くものとしての意識の「盲点」については、『見えるものと見えないもの』の1960年5月の以下の草稿を参照。「意識が見ないもの、意識がそれを見ないのは、原理上の理由からである。それを見ないのは、意識が意識であるからだ。意識がみないもの、それは意識において、他のものを見ることを準備するものである」(*Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard, 1964, p. 301) (以下 VI)。

¹¹ Goldstein, *op. cit.*, p. 92-94.

¹² « Inner speech is the totality of processes and experiences which occur when we are going to express our thought, etc., in external speech and when we perceive heard sounds as language », *ibid.*, p. 94.

¹³ *Ibid.*

¹⁴ フンボルトの言語哲学とメルロ = ポンティの近接性について示唆したものとして Françoise Dastur, *Chair et langage : essais sur Merleau-Ponty*, La Versanne, 2001, pp. 64-65 を参照。

¹⁵ とりわけヴァレリーの影響であろうか、メルロ = ポンティは1950年代の初頭から「機械」(appareil, machine) という表現を多用するようになる。Cf. *Recherches sur l'usage littéraire du langage : Cours au Collège de France, Notes, 1953*, MetisPresses, Genève, 2013, p. 129-13; *Le Monde sensible et le monde de l'expression : Cours au Collège de France, Notes, op. cit.*, p. 82 などを参照。そしてここでも「類型的な言語状況に対する応答能力」としての「内的言語形式」について言及されている。またフンボルトの言語思想に「反記号論的言語観」を見て取る興味深い論考として、ユルゲン・トラバント『フンボルトの言語思想』、村井則夫訳、平凡社、2001年はメルロ = ポンティの言語論理解にも多くの光を与えてくれる。

¹⁶ Cf. PM, 191.「ある領野は別の領野を排除しない。(中略) それはおのずからみずからを多数化する。それは開けであるからであり、身体と同じように、世界に晒されているからである。」

¹⁷ とくに「語る言葉」と「語られた言葉」(ここで言う「制度化する言葉」と「制度化された言葉」)の関係を、たんに習慣という心理学的な概念ではなく、ギュスターヴ・ギョームのランク論(その時間生成)に関係付けた興味深い論考として佐野泰之「＜語られた言葉＞の問題」、前掲『メルロ = ポンティ研究』第19号、pp. 16-30を参照。

¹⁸ 文学的言語使用についての講義においても、当時の言語理論の客観主義が批判され、「超意義(sursignification)」「超客観態(surobjectif)」の持つ「概念なき普遍性」を示す必要が説かれ、同時にそれがピアジェの言語論の批判を含意していることが示唆されている。*Recherches sur l'usage littéraire du langage : Cours au Collège de France, Notes, op. cit.*, p. 87.

¹⁹ ここでは彼のレヴィ = ストロース論における神話の聴取のメカニズムについての表現を利用している。「De Mauss à Lévi-Strauss », S. 195.「明白な内容だけでなく、調子(ton)、速度(allure)、リズム、回帰(récurrence)を聞くことを学ぶこと。」これが必要なのは、神話という未知のものにおいて、「象徴的なものが所与を先取りするから」つまり内容やコンテクストの知識を前提しない「制

度化するパロール」であるからである (S. 198)。

²⁰ 制度概念の意義については、河野勝『制度（社会科学の理論とモデル）』、東京大学出版会、2002年を有益なものとして参照した。

²¹ *Recherches sur l'usage littéraire du langage : Cours au Collège de France, Notes, op. cit.*, p. 87.

²² 非表象的次元で「選択肢を開く」ものとしての「制度化」という考えについては、河本英夫「障害の傍らを通り過ぎる」、『現代思想』vol. 38-12, 2010年10月号、pp. 174-187の大きな示唆を受けた。

²³ たとえば空間における身体と事物の関係についても、それが上下左右という方位からなる空間において、可変的な「水準」(規範性)と「偏差」との関係について定まってくることが指摘される。「〔身体が投錨する諸地点は〕規範からある種の偏差を現す。そしてこの偏差は、規範として認められようとする。偏差を規範とみなすこと、それはそれらを図とみなすことをやめ、諸次元としてみなすことである。ある水準はつねに別の水準を前提とする＝知覚そのものがおのずから空間的で、受肉したものであり、状況付けられている。空間はあらゆる構成にさきだち、あらゆる知覚はある水準に相対的なものである」(Maurice Merleau-Ponty, *Le Monde sensible et le monde de l'expression : Cours au Collège de France, Notes, 1953, op. cit.*, p. 73.

²⁴ *Ibid.*, p. 131.